

## 巻頭言

ヤミが鳴き、空が青く晴れ渡るよ、あの日のことを昨日のよりに思い出す。それはまだほくが少年の病後が癒えて間のない頃、可愛がついてくれた近所の奥さんがこころあった。

「坊ちゃん、11月9日のよ、せむなごぶネ。終戦日。」と確か田一杯泪をためていたようであった。ほくはびっくりした。アメリカが広島に原子爆弾というものを落としたというのだ。よぶんからなかったが、一瞬のうちにマチがなくなつたというのよのよのよ。

ほくらは当時朝鮮の京城府というマチに住んでいて終戦の被害は全く無く、その悲惨な想像も及ばなかったのだ。

ひとは自分が経験しないことはワカラナイのだ。だから平気で悲惨なことは無関係に生きつづける。そのよをなければ戦争を起しるわけがない。命令を出す側は主へシモンモトは無関係である。

やう病気になるよ、ごころよんかぬいよがある。ひとは孤独だよはにいよまのーひである。だから思えば泣きたくなるよんに生まるごころよんがありがたいのだ。しまり死ぬいよはごころよんをいよのよだ。しまり誰でも必ず一度は死ぬのよだか。

渋谷へん、早く治って一杯やろ。待ってろ。

(重朝記)